西新井税務署長賞

「税金がひらく未来への扉」

足立区立　新田中学校

三年　榎戸　七海

二〇二六年八月十一日午前四時二十三分、種子島宇宙センターから日本の新型ロケット「H三」九号機が宇宙空間へ打ち上がっていった。無事に打ち上げは成功し、「みちびき」七号機が宇宙へ運ばれた。この打ち上げ成功の背景には、日本が宇宙開発に力を入れている現状がある。実際、二〇二六年度の宇宙関係予算は一兆四百四十六億円と、日本の歴史上初めて「一兆円」の大台を突破した。

では、この巨額の予算はいったいどこから出ているのだろうか。調べてみると、その大部分は私たちの税金から賄われていることがわかった。税金といえば社会福祉や公共事業といった日々の暮らしに使われているイメージが強かった私にとって、普段の生活とは離れたところにある宇宙開発になぜ多くの税金が使われているのか気になった。そこで税金と宇宙という一見かけ離れた二つがどのように、なぜ結びついているのかたどってみた。

税金と宇宙開発の関わりを詳しく調べてみて分かったのは、宇宙開発が遠い世界の話ではなく、私たちの毎日を支える「目に見えないインフラ」として溶け込んでいるということだった。例えば今回のH三ロケットが運んだ人工衛星のおかげで、スマートフォンの位置のズレが十メートル規模から数センチレベルにまで縮まったり、ビルの陰や山奥でもＧＰＳが途切れにくくなったりし

て、私たちの生活はより快適になっている。また、毎日ニュースで流れている天気予報や災害の早期警戒などは日本の気象衛星があるから成り立っている。もし宇宙開発を行わなかったら、私たちの生活は不便なものになってしまうだろう。日本だけでなく世界が宇宙開発に力を注いでいるのは、私たちの暮らしを維持し、より良くするためだったのだ。

しかし、宇宙開発にかける税金の価値はこれだけではない。宇宙開発はまだ見ぬ明日、世界を豊かにするための手段の一つでもあるのだ。一例として国際宇宙ステーション、いわゆるＩＳＳにある「きぼう」では、今はまだ治せていない病気の特効薬や、これまでにない新素材の開発を進めている。このような宇宙での研究は私たちの命や科学を発展させる可能性を秘めているのだ。さらに、将来的には月に基地を作って人が暮らせるような研究を「アルテミス計画」の一環で行われている。漫画やアニメの世界でしか見たことのない月での暮らしが私たちの税金によって現実化されようとしているのだ。人類の可能性を広げる大きなロマンがそこには眠っている。

税金は私たちの暮らしを支えているだけではなく、新たな世界を見るための未来への投資でもあった。もともと宇宙に興味があった私だが、宇宙開発や研究が税金によって支えられていると知り、税金が夢のあるものに思えてきた。見上げる夜空のどこかで未来の可能性が飛んでいる。私も税金を通じてあの暗闇に小さな光を打ち上げる一人となりたい。